

## 高校生の精神的健康と情動制御および家族・友人関係

平山聡子\*

### Emotion Regulation, Family/Peer Relationships, and Mental Health in Japanese High School Students

HIRAYAMA Satoko

#### abstract

Relationships between emotion regulation, family/peer support, and mental health were examined in Japanese adolescents. Over 200 high school students (mean age =16.3 years) were scored on two emotion regulation scales (emotion regulation and intrapersonal domain of emotional intelligence), the scale of expectancy for social support (four supporters; father, mother, siblings and peers), and two mental health scales (depression and self-esteem). In this sample of Japanese adolescents, the ability to regulate emotions mediates the relationship between family/peer support and mental health.

Keywords : emotion regulation, family, peer, adolescence, mental health

#### はじめに

青年期は精神的に不安定な時期であり、青年の精神的健康に関する要因について探ることはこれまで多くの研究者の関心領域となっている。本研究では、情動と認知の相互作用の観点から近年注目されてきている情動制御能力 (Gross 1998; Silk, Steinberg, & Morris, 2003) に焦点を当て、従来から青年にとって重要と言われてきた家族関係や友人関係 (Khaleque & Rohner, 2002; 黒田・有年・桜井, 2004; Prinstein, Boergers, Spirito, Little, & Grapentine, 2000) との比較の中で情動制御がどのように青年の精神的健康に関連しているのかを検証する。

情動制御は「情動表現や内面の気持ちをコントロール、管理、調整できる能力」と定義される (Matsumoto, Yoo, Hirayama, & Petrova, 2005)。これにはネガティブな情動を単に抑制することだけではなく、情動に潜む適応的な面を活かすことも含まれる (遠藤, 2005)。また、情動制御の類概念に情動知能がある。これは「情動を知覚すること、思考を助けるために利用し作り出すこと、情動と情動の知識を理解すること、情緒的知的な成長を促すように情動を制御すること」 (Mayer & Salovey, 1997) と定義される。どちらの概念も情動を機能的に用いるスキルや能力を差している。本研究ではこれらの概念を操作的にまとめて「情動制御」と呼ぶことにする。

青年期は身体的・心理的・社会的な変化に伴いこれまでに経験したことのないような情動を経験すること、情動制御の基となる認知能力がこの時期に成熟すること、そして精神的な病理が発現する割合が高くなることなどから、青年期における情動制御の役割が注目されている (Galambos & Costigan, 2004; Silk, et al., 2003)。青年期の自尊感情の低さや抑うつの高さなどの精神的健康は、情動制御の不全といった観点から捉えなおすことができることも指摘されており (Cole, Michel, & Teti, 1994; Galambos & Costigan, 2004)、理論的にも精神的健康の向上のためには情動を制御できる力が必要であることが示唆されている。

---

キーワード：情動制御、家族、友人、青年期、精神的健康

\*平成 11 年生 人間発達科学専攻

実証的にも、自分の考えていることや、状況に対する捉え方を変えることによって自分が望むように情動を調整できるほど、抑うつが低く生活満足度や楽観性、自尊感情が高いという報告がある (Gross & John, 2003; Gross & Levenson, 1997)。また、渡米中の青年を対象にした調査では、異文化のストレス状況下においても情動を安定させて対応できる人ほど抑うつや不安が低く、社会的適応や主観的適応、人生満足度が高いことも示されている (Matsumoto, LeRoux, Bernhard, & Gray, 2004; Matsumoto et al., 2003; Matsumoto et al., 2001)。非適応的な思考をうまくコントロールできるほど抑うつ気分が生じにくいことも報告されている (杉浦・馬岡, 2003)。このように情動制御能力は青年の精神的健康に大きく関与していることがうかがえる。

しかし精神的健康には様々な要因が影響しており、情動制御が他の要因と比べてどのような役割を担うのかについて明らかにすることが必要である。青年期は親から独立し、自律性を確立する時期であるため、悩みを語り合う同世代の友人が必要となる一方、まだまだ親からの影響も強く受けている時期であるため家族や友人との関係は大きな影響力を持つ要因だと言える。特に自分のことをよくわかってくれ、話をよく聞いてくれるなどのサポートタイプな関係が最も好ましい影響を及ぼすことが先行研究で示されている (Branje, van Lieshout, van Aken, & Haselager, 2004; Caldwell, Silverman, Lefforge, & Silver, 2004; Colarossi & Eccles, 2003; 福岡・橋本, 1995; Scholte, van Lieshout, & van Aken, 2001; Way & Robinson, 2003)。

サポートは外的な要因である一方、情動制御は個人の内的な要因であることを考えると、家族や友人からのサポートと情動制御がそれぞれ独立して青年の精神的健康に関連していると考えよりは、家族や友人とのサポートタイプな関係の中で情動制御能力が育まれ、その結果精神的健康も向上すると考える方が妥当かもしれない。そこで本研究では高校生を対象とし、情動制御と家族や友人からのサポートが青年の精神的健康とどのように関連しているかを検証することを目的とする。情動制御と家族や友人からのサポートが並行して精神的健康に関連しているモデルと、情動制御が家族や友人からのサポートと精神的健康との関連を媒介するモデルを比較し、後者の方がモデルの当てはまりが良いことが予想される。

## 方法

### 調査対象者

関東の2つの高校1年生から3年生202名(男子97名,女子93名,不明12名,平均年齢16.29歳)を対象とした。

### 情動制御の測度

本研究では、情動を喚起されるようなストレス・葛藤状況に置かれた時にいかに情動を安定させて対応できるかといった能力を測る尺度の他、情動知能の尺度のうち情動制御の概念に当たる下位尺度を用いた。情動制御に関しては海外で開発された尺度が多い中、これら2つの尺度は日本人を対象として標準化されている。

国際適応力尺度 (ICAPS; Matsumoto et al., 2001) 下位尺度の「情動制御」は、ストレスや葛藤状況において情動を適切に制御できる能力を測定している。具体的には緊急時にも落ち着いて対応でき、情緒が安定してポジティブな感情を持っていられるなどといった面であり、異文化状況に限らず適応一般に必要な情動制御能力と考えられる。この尺度の信頼性・妥当性は高い (Matsumoto et al., 2004; Matsumoto et al., 2003)。「普通は緊急時にうまく対処できる」「うまくいかないかもしれないとよく心配する」「何か間違った事をしたら、人から隠れたいと思う」などの11項目について「全くそう思わない」から「非常にそう思う」まで7件法で回答を求めた (Matsumoto et al. 2001)。幾つかの項目については「緊迫した状況に陥ると不安になる」の「緊迫した」を「緊張した」に、「上司が周りにいると居心地が悪い」の「上司」を「先生」に変更するなど、青年にわかりやすい表現に訂正した。逆転項目処理後の各項目の合計得点を「情動制御」得点とした。得点範囲は11～77点であり、得点が高いほど情動を制御していることを示す。本データでの $\alpha$ 信頼性係数は.68であった。

情動知能尺度 (EQS; 内山・島井・宇津木・大竹, 2001) 情動知能の下位領域である自己対応領域は「自己の心の働きについて知り、行動を支え、効果的な行動をとる能力」を評価しており、情動制御の一側面と言える。この構成概念には自己洞察、自己動機づけ、自己コントロールの3つの対応因子があるが、内山ほか (2001) はこれら21項目の合計得点を「自己対応領域得点」として算出しているため、本研究ではこの合計得点を分析に用いることにする。本研究のデータでも主成分分析を行ったところ一因子性が確認された。この尺度の信頼性・

妥当性は高い(内山ほか, 2001)。項目例は「今の自分の感情を言葉に表せる」「意味があつて始めたことはともかく続けていきたい」「その場面に応じて自分の感情を抑えることができる」などである。また、青年にわかりにくいと思われる項目に関しては、意味が変わらないように注意をしながら修正した。例えば自己洞察では「感情的になる」という表現がわかりにくいと思われたため「感情が高ぶった時でも自分がどう感じているかわかっている」に修正した。自己動機づけでは「下積みの仕事」という表現が高校生には当てはまらないので「基礎的な勉強にも意味を見つけていきたい」に修正した。自己コントロールでは「声を荒げる」という表現がわかりにくいと思われたため「気に障った時でもどなったりしない」に修正した。5件法で回答を求め、「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」まで5件法で回答を求め、合計得点を算出した。得点範囲は0～84点であり、得点が高いほど情動を機能的に用いることができることを示す。本データでの $\alpha$ 信頼性係数は.86であった。

#### 家族・友人関係の測定

学生用ソーシャル・サポート尺度 (SESS; 久田・千田・箕口, 1989)「普段から自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえるという期待の強さ」を測定している。信頼性・妥当性は高い(久田・千田・箕口, 1989)。本研究では久田ほか(1989)の項目の表現をわかりやすく修正した岡安・嶋田・坂野(1993)の項目を用いた。「あなたがする話を、いつもよく聞いてくれる」「ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる」「あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる」などの16項目について各対象(父親・母親・一番仲の良いきょうだい・一番仲の良い友人)ごとに4件法で回答を求め、それぞれ合計得点を算出した。得点範囲は16～64点であり、得点が高いほどサポートを期待できる度合いが高いことを示す。本データでの $\alpha$ 信頼性係数は父親からのサポートが.95、母親が.95、きょうだいが.97、友人が.95であった。

#### 精神的健康の測定

東大式健康調査票の抑うつ尺度(鈴木・青木・柳井, 1989)日本人を対象に作成された健康調査のうちの抑うつ傾向を測る尺度である。信頼性・妥当性は高い(川田・鈴木・久保田・大西・佐藤, 1999)。他の抑うつ尺度と比べ、「性欲の減退」や「自殺願望」などの項目が用いられていないことから高校生に使い易いと判断した。「近ごろ元気がないですか」「ゆううつなときがありますか」などの10項目について「いいえ」から「よく」まで3件法で回答を求め、合計得点を算出した。得点範囲は10～30点であり、得点が高いほど抑うつ度が高いことを示す。本データでの $\alpha$ 信頼性係数は.85であった。

自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)の日本語版(山本, 2001; 山本・松井・山成, 1982)を用いた。全般的な自尊感情を測る尺度である。日本語版の信頼性・妥当性は高い(遠藤・井上・蘭, 1992)。「大体において自分に満足している」「自分は全くだめな人間だと思うことがある」など10項目について「全くそう思わない」から「非常にそう思う」まで4件法で回答を求め、逆転項目の処理後、合計得点を算出した。得点範囲は10～40点であり、得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。本データでの $\alpha$ 信頼性係数は.81であった。

#### 手続き

各クラスの担任の教師を通して授業時間内に質問紙を配布し、その場で記入してもらった。調査実施時には調査は匿名で行われ、答えたくない項目には答えなくてもよいこと、調査協力は任意であることを教示した。順序効果を考慮し、各尺度の順番をランダムに配置した。調査時期は2005年6～7月であった。統計パッケージはSPSS12 for Windowsを使用した。

## 結果

まず、情動制御および家族や友人からのサポートと精神的健康との間の単相関を男女別に算出した(表1)。男子では、情動制御の両得点と父親・友人からのサポートが抑うつと弱～中程度の有意な負の相関を示し、自尊感情に関しては情動制御および家族や友人のサポートの全得点が弱～中程度の有意な正の相関を示していた。特に男子にとってはICAPSの情動制御の高さや、父親からのサポートの多さが精神的健康と中程度の相関が見られ、比較的関連性が強いことがうかがえる。女子の場合は、情動制御の両得点が高く、両親(特に母親)と友人からのサポートが多いほど抑うつが低いという弱～中程度の負の相関が見られた。女子の自尊感情に関しては情動制御の両得点が弱～中程度の正の相関を示し、サポートとの有意な関連は得られなかった。

表 1 高校生の情動制御・家族や友人からのサポートと精神的健康との相関

	男子		女子	
	抑うつ	自尊感情	抑うつ	自尊感情
情動制御				
ICAPS 情動制御	-.639*** (95)	.589*** (96)	-.519*** (92)	.515*** (91)
EQS 自己対応	-.211* (93)	.280** (94)	-.256** (91)	.247** (90)
サポート				
SESS 父親	-.322** (79)	.406*** (79)	-.198* (78)	-.034 (79)
SESS 母親	-.179 (83)	.292** (84)	-.261** (84)	.081 (85)
SESS きょうだい	-.105 (76)	.200* (76)	-.150 (73)	-.070 (74)
SESS 友人	-.295** (89)	.297** (89)	-.284** (88)	.170 (87)

注. ( ) 内の数字は人数  
 p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

次に情動制御と家族や友人からのサポートがどのように精神的健康と関連しているかを検討するため、共分散構造分析を行った。男女別にすると人数が少なくなり、結果の信頼性が低まるため、ここでは男女合わせて分析を行った。情動制御にはICAPS 情動制御得点とEQS 自己対応得点を観測変数とした潜在変数を用い、家族・友人からのサポートには、各サポート源（父親・母親・きょうだい・友人）の4得点を観測変数とした潜在変数を用いた。また精神的健康には抑うつと自尊感情の得点を観測変数とした潜在変数を用いた。そして情動制御と家族や友人からのサポートが並行して精神的健康に関連しているモデル（モデル1）と、情動制御が家族や友人からのサポートと精神的健康との関連を媒介するモデル（モデル2）を比較した。なお、きょうだいからのサポートに関しては一人っ子のデータが排除されること、および全体の分析の人数が減るため、家族・友人からのサポートに関し、まずは両親と友人のサポートのみを用いて分析をした。その後きょうだいからのサポートを加えて再度同様の分析を行った。

きょうだいからのサポートを除いた場合の分析に関し、モデル1（図1）とモデル2（図2）の適合度を比較したところ、モデル1はGFI=.96, AGFI=.91, RMSEA=.080, モデル2はGFI=.97, AGFI=.93, RMSEA=.048であり、モデル2の方がモデル1よりも当てはまりが良いことが示された。モデル2において、家族・友人のサポートから情動制御への標準化パス係数は.34、情動制御から精神的健康への標準化パス係数は-1.24であり、家族や友人からのサポートの多さが情動制御の高さを介して良好な精神的健康に関連していることが示された。

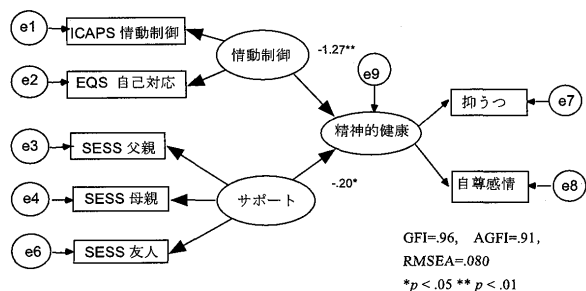


図1 共分散構造モデル1の結果：きょうだいからのサポートを含まない場合

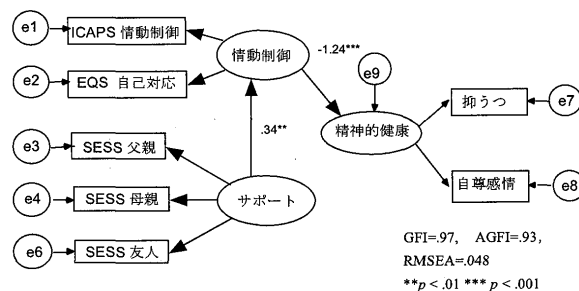


図2 共分散構造モデル2の結果：きょうだいからのサポートを含まない場合

きょうだいからのサポートを含めた場合も同様にモデル1（図3）とモデル2（図4）の適合度を比較したところ、モデル1はGFI=.96, AGFI=.91, RMSEA=.055, モデル2はGFI=.96, AGFI=.93, RMSEA=.029であり、やはりモデル2の方がモデル1よりも当てはまりが良いことが示された。

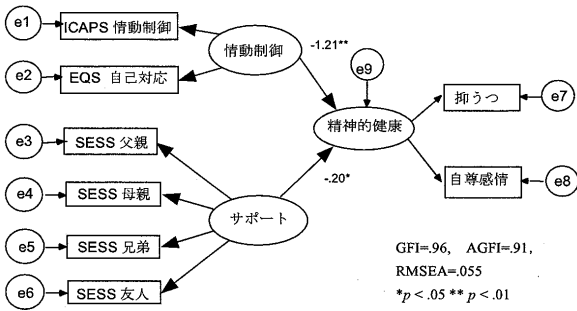


図3 共分散構造モデル1の結果：きょうだいからのサポートを含めた場合

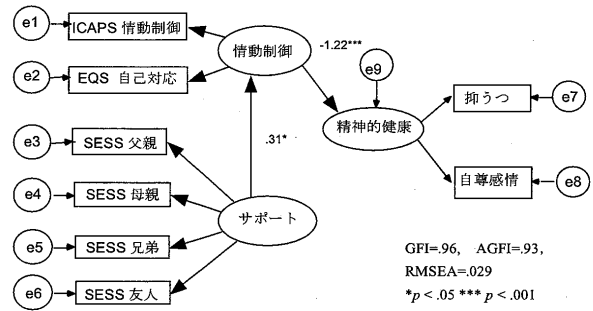


図4 共分散構造モデル2の結果：きょうだいからのサポートを含めた場合

### 考察

本研究では、情動制御と家族や友人からのサポートが、青年の精神的健康とどのように関連しているかを検証するために、まず男女別の相関分析を行い、次に共分散構造分析を用いて2つのモデルを比較した。相関分析の結果によると、男女とも情動制御が高いほど抑うつが低く自尊感情は高いことが示され、情動制御能力の重要性が示された。また、先行研究では女子の方が男子と比べて一般的には人間関係面でのサポートが重要な意味を持つという報告が多くなされているが (Wohlgemuth, & Betz, 1991), 本研究での相関分析結果を見る限りでは、女子の抑うつが父親・母親・友人からのサポートと負の相関を示したに留まり、むしろ男子が家族・友人からのサポートが多いほど抑うつが低く自尊感情が高いという関連を示していた。この性差の分析に関しては対象人数も少ないため、結論を出す前に他のデータを用いても同様の結果が得られるか確認する必要があるだろう。ただ本研究のデータからは、特に女子では母親と友人からのサポート、男子では父親と友人からのサポートにおいてそれぞれ他のサポート源と比べて精神的健康との関連性の強さが窺え、同性の親や友人が自分のことをわかってくれて支えてくれると期待できることが高校生の時期には大事であることがうかがえる。

次に共分散構造分析の結果を見ると、情動制御と家族や友人からのサポートが並行して精神的健康に関連しているモデルよりも、情動制御の高さが家族や友人からのサポートの多さと精神的健康の良好さとの関連を媒介しているモデルの方が適合度の高いことが示され、仮説が支持された。小保方・無藤 (2005) は中学生では学年が上がるにつれ親子関係の影響が小さくなり、代わりに個人内の能力であるセルフコントロール力が青年の問題行動の抑制に大きく関わってくることを示している。このように、青年期には家族・友人関係の良さが精神的健康や問題行動の低下に直結するというよりも、個人内の能力の高さが重要になってくることがうかがえる。本研究では、家族や友人からのサポートが期待できる環境では自分の情動制御能力が高まりやすく、それが抑うつの低さや自尊感情の高さにつながることを示された。

今後の研究では、人数を増やして、本研究で得られた情動制御や家族・友人関係と精神的健康との関連性や性差の結果を確認したい。高校生の学年間の比較や、中学生・大学生との比較など発達的な検討も行うことが課題と言える。また、情動制御の概念は幅広く (Bridges, Denham, & Ganiban, 2004; Cole, Martin, & Dennis, 2004; Eisenberg & Spinrad, 2004), 本研究で取り上げた情動制御の尺度だけでは全ての側面を網羅することはできない。従って今後は情動制御の概念整理を行い、どのような側面が精神的健康と関連しているのかを検証していくことも必要と考える。

### 謝辞

本研究の実施にあたりご指導いただきましたお茶の水女子大学の無藤隆先生、藤田宗和先生、サンフランシスコ州立大学のDavid Matsumoto先生にこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました高校の先生方、生徒の皆様にも心より感謝申し上げます。

文献

- Branje, S. J. T., van Lieshout, C. F. M., van Aken, M. A. G., & Haselager, G. J. T. (2004). Perceived support in sibling relationships and adolescent adjustment. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 45 (8), 1385-1396.
- Bridges, L. J., Denhan, S. A., & Ganiban, J. M. (2004). Definitional issues in emotion regulation research. *Child Development*, 75 (2), 340-345.
- Caldwell, R. M., Silverman, J., Lefforge, N., & Silver, N. C. (2004). Adjudicated Mexican American adolescents: The effects of familial emotional support on self-esteem, emotional well-being, and delinquency. *American Journal of Family Therapy*, 32 (1), 55-69.
- Colarossi, L. G., & Eccles, J. S. (2003). Differential effects of support providers on adolescents' mental health. *Social Work Research*, 27 (1), 19-30.
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004). Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75 (2), 317-333.
- Cole, P. M., Michel, M. K., & Teti, L. O. (1994). The development of emotion regulation: A clinical perspective. In N. A. Fox (Ed.), *The Development of Emotion Regulation: Biological and Behavioral Considerations*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol. 59, pp. 73-100).
- Eisenberg, N., & Spinrad, T. L. (2004). Emotion-related regulation: Sharpening the definition. *Child Development*, 75 (2), 334-339.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽. (1992). セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求. 京都: ナカニシヤ出版.
- 遠藤利彦. (2005). 感情的知性をどう育むか. *教育と医学*, 53 (11), 18-27.
- 福岡欣治・橋本 幸. (1995). 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係. *教育心理学研究*, 43, 185-193.
- Galambos, N. L., Leadbeater, B. J., & Barker, E. T. (2004). Gender differences in and risk factors for depression in adolescence: A 4-year longitudinal study. *International Journal of Behavioral Development*, 28 (1), 16-25.
- Gross, J. J. (1998). The emerging field of emotion regulation: An integrative review. *Review of General Psychology*, 2 (3), 271-299.
- Gross, J. J., & John, O. P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.
- Gross, J. J., & Levenson, R. W. (1997). Hiding feelings: The acute effects of inhibiting negative and positive emotion. *Journal of Abnormal Psychology*, 106 (1), 95-103.
- 久田満・千田茂博・箕口雅博. (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1). *日本社会心理学会第30回大会発表論文集*, 144.
- 川田智之・鈴木庄亮・久保田文雄・大西直樹・佐藤浩司. (1999). 東大式健康調査票抑うつ尺度 (THI-D) の内容妥当性, および THI-D と米疫学研究センター式抑うつ尺度やツング自己評価式抑うつ尺度との交差妥当性. *産業衛生学雑誌*, 41 (4), 160.
- Khaleque, A., & Rohner, R. P. (2002). Perceived parental acceptance-rejection and psychological adjustment: A meta-analysis of cross-cultural and intracultural studies. *Journal of Marriage and Family*, 64 (1), 54-64.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男. (2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互強調的—相互独立的自己観を踏まえた検討—. *教育心理学研究*, 52, 24-32.
- Matsumoto, D., LeRoux, A. J., Bernhard, R., & Gray, H. (2004). Unraveling the psychological correlates of intercultural adjustment potential. *International Journal of Intercultural Relations*, 28 (3-4), 281-309.
- Matsumoto, D., LeRoux, A. J., Iwamoto, M., Choi, J., Rogers, D., Tatani, H., & Uchida, H. (2003). The robustness of the intercultural adjustment potential scale (ICAPS): the search for a universal psychological engine of adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 27, 543-562.
- Matsumoto, D., LeRoux, J., Ratzlaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C., & Araki, S. (2001). Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: The Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations*, 25, 483-510.
- Matsumoto, D., Yoo, S., Hirayama, S., & Petrova, G. (2005). Development and initial validation of a measure of display rules: The Display Rule Assessment Inventory (DRAI). *Emotion*, 5 (1), 23-40.
- Mayer, J. D., & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Implications for educators* (pp. 3-31). New York: Basic Books.
- 小保方晶子・無藤 隆. (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因. *発達心理学研究*, 16 (3), 286-299.

- 岡安孝弘・鴨田洋徳・坂野雄二. (1993). 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果. 教育心理学研究, 41, 302-312.
- Prinstein, M. J., Boergers, J., Spirito, A., Little, T. D., & Grapentine, W. L. (2000). Peer functioning, family dysfunction, and psychological symptoms in a risk factor model for adolescent inpatients' suicidal ideation severity. *Journal of Clinical Child Psychology*, 29 (3), 392-405.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Scholte, R. H. J., van Lieshout, C. F. M., & van Aken, M. A. G. (2001). Perceived Relational Support in Adolescence: Dimensions, Configurations, and Adolescent Adjustment. *Journal of Research on Adolescence* (Vol. 11, pp. 71): Blackwell Publishing Limited.
- Silk, J. S., Steinberg, L., & Morris, A. S. (2003). Adolescents' emotion regulation in daily life: Links to depressive symptoms and problem behavior. *Child Development*, 74 (6), 1869-1880.
- 杉浦知子・馬岡清人. (2003). 女子大学生における認知的統制と抑うつとの関連. 健康心理学研究, 16 (1), 31-42.
- 鈴木庄亮・青木繁伸・柳井晴夫. (1989). *THIハンドブック -- 東大式自記健康調査のすすめ方 --*. 東京: 篠原出版.
- 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子. (2001). *EQS マニュアル*. 東京: 実務教育出版.
- Way, N., & Robinson, M. G. (2003). A longitudinal study of the effects of family, friends, and school experiences on the psychological adjustment of ethnic minority, low-SES adolescents. *Journal of Adolescent Research*, 18 (4), 324-346.
- Wohlgemuth, E., & Betz, N. E. (1991). Gender as a moderator of the relationships of stress and social support to physical health in college students. *Journal of Counseling Psychology*, 38, 367-374.
- 山本真理子 (編). (2001). *心理測定尺度集 I - 人間の内面を探る<自己・個人内過程>*. サイエンス社.
- 山本真理子・松井 豊・山成 由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

(2006年12月1日受理)